

沿革

奈良は、710年に元明天皇により、「平城京」として開都され、天平文化が開花し、政治経済の中心として栄えておりました。784年の長岡京遷都後も平城京をかざった諸大寺はそのまま残され、南都と呼ばれるようになり、社寺の都として生まれ変わりました。

12世紀後半には、多くの社寺等が戦火に焼かれたものの鎌倉時代には復興し、東大寺、興福寺、春日大社等の門前町が形成されました。江戸時代には観光や、奈良晒、製墨といった商工業で繁栄を見せました。

明治維新では、廃仏毀釈によって多くの寺院が衰退し、また、廃藩置県のものち、奈良県が一時期、堺県や大阪府に合併されました。1887年に奈良県庁が奈良町に復帰し、1898年(明治31年)2月1日に奈良市制が施行され、当時の面積は23.44 k㎡、人口は29,986人でした。

鉄道の整備は、1890年に奈良・王寺間がまず開通し、大阪(湊町)(現JR関西線)へは、1892年に通じました。1914年には、奈良・大阪(上本町)間(現近鉄奈良線)が開通しました。これら以外にも鉄道網の整備が進み、周辺都市との間で交通条件も整い、観光客も増えていきました。

第2次世界大戦で奈良は、京都、鎌倉とともに大きな戦禍をまぬがれ、貴重な自然や文化財が保存されてきました。このようななかで、1950年(昭和25年)には、「奈良国際文化観光都市建設法」が住民投票の結果を受けて成立し、国際文化観光都市として整備を進めていくことになりました。また、この頃から、近鉄学園前駅周辺において宅地開発が進められました。高度成長期に入ってから、西北部丘陵一帯にも宅地開発が広がり、近畿圏から多くの人々を迎えることになりました。

1988年に策定された「関西文化学術研究都市の建設に関する計画」においては、奈良市の平城宮跡地区と奈良市を含む平城・相楽地区が文化学術研究地区に指定されました。

平城京以来の豊かな自然と歴史の上に、現代都市としての風格を備えていくなかで、市制施行100周年の記念すべき年に、8つの資産群が「古都奈良の文化財」としてユネスコの世界遺産リストに登録され、本市の文化財がより一層重要な役割を果たすようになりました。

2002年には、全国で29番目の中核市に移行しました。

2005年4月に合併した旧月ヶ瀬村は、15世紀ごろ染物の媒染剤である烏梅の製造が伝わったことで梅の栽培が盛んになったとされ、1922年には、名勝「月瀬梅林」の指定を受け、守り継がれてきた豊かな自然や梅とともに発展してきました。

一方、旧都祁村は、伊勢や伊賀などに通じる交通の要衝として栄え、伊勢街道を中心に様々な文化が伝えられ、1965年には国道25号(名阪

国道)が開通したことで、交通の便が飛躍的に向上し、工業団地や住宅の開発が進められてきました。

このように異なるまちづくりを進めてきた旧奈良市、旧月ヶ瀬村、旧都祁村が2005年4月に合併し新生「奈良市」が誕生しました。それぞれがもつ地域資源や機能を相互に補完しあいながら魅力あるまちづくりを進めています。